

平成 26 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第39回を迎えた校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生から4年生まで合わせて今回358編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会の教員7名と一般教科の国語担当教員4名の計11名による厳正な審査と投票を経た結果、最優秀賞1名と優秀賞7名の計8名の入選を決定しました。ここに入選者の氏名と読書感想文のタイトルを掲載し、その榮譽を称えます。

最優秀賞

物質化学工学科1年 三雲 理紗 「生きること－『晴天の迷いクジラ』を読んで」

優秀賞

機械工学科1年	永岡 颯太	「アイデアの種」
情報工学科1年	矢野 真綾	「『8分音符のプレリュード』を読んで」
機械工学科2年	田村 直人	「応援し、応援されること」
機械工学科2年	中村 友哉	「理想と現実、そしてその先」
情報工学科2年	石田 豊実	「できることを－『舟を編む』を読んで」
情報工学科2年	林 大泰	「『死んでも死なない』という決意」
物質化学工学科2年	森 貴典	「目標を持つことの重要性」

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品16編について佳作としました。以下に、氏名を紹介し、その努力を称えます。

佳作

1 M 伊東 聡	1 E 内田 啓太	1 E 出井 秀征	1 E 峯島 基
1 S 木田 圭祐	1 S 百歩 明	1 I 國貞 浩良	1 C 谷本 陸
2 E 紀伊 凜香	2 E 辰巳 幸弘	2 S 津田 航汰	2 S 大西 和真
2 S 丸本 壮起	2 C 平地 由佳	2 C 濱邊 幸奈	4 C 隅谷 大良

さて、読書感想文とは、本を読むことによって心に生まれた感想や感動、印象や疑問などを書き表した文章をいいます。私たちは、読書をして読書感想文にまとめることで本の内容をより深く理解することができ、また、その結果、内容について新しい解釈や気づかなかった自己発見をすることが可能となります。

そこで読書感想文では、まず、どのような本を読むかが最初のポイントになります。その意味で、本との出会いは人との出会いに似ています。出会いのチャンスは至る所にありますが、よい出会いというのは自ら求めるところを訪れます。そして、読むべき本と出会えば、あとは読み続けることで本の世界に入り込んでいくことができます。

今回、最優秀賞を受賞した三雲さんは、窪美澄著『晴天の迷いクジラ』という本と出会いました。そして三雲さんは、死を決意した登場人物3人が湾に迷い込んだクジラを見ようと行動を起こし、出会い、絆を深めていく奇跡に対し、羨望し、嫉妬を感じます。また、登場人物の1人の正子とその友人である忍の関係を、中学時代に病と闘いながらいつも笑っていた友人と自分の関係に重ね合わせ、当時、自分が行動を起こさなかったことを後悔する一方で、自ら行動を起こすことで状況は変わり選択肢が増え、人は前向きに変われることを発見し、「生きることは行動することではないか」という考えに至っています。

また、優秀賞の情報2年の林さんは伊坂幸太郎著『終末のフール』という本に出会いました。そして、たとえ困難に出会っても「とにかく生きる」ことで困難に立ち向かうことの重要性を知り、自らの人生を生きていく決意を新たにしています。

このように本と出会い、読み通し、読書感想文を書くことによって、本をいっそう深く理解し自分の感じ方、ものの見方、考え方を再認識するとともに、これまでの自分の生き方を振り返り、新しい自己を切り開いています。今回の入選者の場合、そのテーマを見ると上述の「生と死」のほか、情熱であり、友人関係、人間関係、将来の職業などでした。

最初に、テーマが情熱の作品を見ましょう。

情報1年・永岡さんの「アイデアの種」は、作者の絵本製作の実例を通してアイデアを求める熱い思いこそがアイデアの種になるということを見出しています。また、情報2年・中村さんの「理想と現実、そしてその先」は、困難に耐え、努力し、妥協しない勇気こそが理想を実現させるということを見出しています。そして、物質化学2年・森さんの「目標を持つことの重要性」は、居残り補習をきっかけに見失っていた目標を育て実現させた女子高専生の姿に森さんが共感し、目標を持って努力する気持ちを新たにしている過程を綴っています。

次は、友人関係、人間関係がテーマの作品です。

情報1年・矢野さんの「『8分音符のプレリュード』を読んで」は、優等生の主人公が自分より優れた転校生の登場に対して抱いたライバル心と嫉妬心の格闘を的確に読み取り、今の自分自身を見つめ直しています。また、機械2年・田村さんの「応援し、応援されること」は、母校の応援団を立て直すために奮闘する主人公の姿から、今、自分が周囲から応援されている存在であることに気づき、自らもエールを送る存在になりたいと思いを深めています。

最後は、テーマが職業観とでもいう作品です。

情報2年・石田さんの「できることを－『舟を編む』を読んで」は、面倒くさく地味と思われがちな辞書作りの話を読んだ感想文です。主人公は辞書作りの仕事が苦手で自分の適性に悩んでいましたが、自分の得意な交渉力を生かすことが自分の役割だと気づき、その悩みを解消していきました。このことから、石田さんは仕事への適性は有るか無いかではなく、自分の中に見つけて育てていくものだと考えるようになり、読んだ本との出会いに感謝しています。

こうしてみると、本を読むことが若い読者にとって大きな意義を持つことは言うまでもありませんが、さらに読書感想文を書くことを通じて新たな自己発見があり、自己変容が行われていることが分かります。

そこで、助言です。今回、書き上げた読書感想文をそのまま提出したあなたは、次回は書き上げた感想文をもう一度読み直し、よく推敲したうえで清書して提出することを実行してください。そうすると、本を読み通し考えたことであなたに起こった変化、成長がいっそう明確になり、読書感想文の読者にもそれがいっそう効果的に伝わるようになると思います。

第40回を迎える平成27年度の読書感想文コンクールへの主体的な応募を期待しています。

(国語担当：井上次夫)

